



慶應義塾大学ビジネス・スクール

財務管理入門〔全面改訂版〕

5

財務管理の基本機能

一口に「経営学」と言っても、ひと、もの、かね、情報、それらの経営資源を有機的に組み合わせて方向付けを行なう経営政策などと言い慣らわされているように、その対象領域は誠に広範にわたっている。その中であって、かね（金）の管理に関する財務管理の基本機能は一体何と考えれば良いのであろうか。通常、財務管理の二大目的としては、「資産の最適な運用」および「負債の最適な調達」が挙げられることが多い。これらは、誤りではない。しかし、ここでは、より根源的に財務管理の基本機能を規定してみよう。すると、経営学における財務管理の機能として、第一義的に考えられることとして、「ものやサービスの価値を評価する」ことに気づく。「ものやサービスの価値評価」が可能だからこそ、資産の代替的な運用方法の内から最適なものが確定できるのであるし、同様に、複数の資金調達手段の中から最適な代案を見つけ出すことができるのである。例えば、事務機器（コピー機）の購入を検討している企業を想定してみる。企業としては、一定のコピー品質やアフター・ケア条件を満たした上で、できるだけ低コストとなるような、コピー・サービス機能を得るための代替的な手段を比較検討することであろう。以上のことは、小資産（コピー機）から得ると期待されるサービス、また、それと引換えにするコストを見積もることが出来れば、当該小資産（コピー機）の評価額純額が正か負かを判定することで意思決定を行なうことができる。すなわち、当該資産の取得（＝資産運用方法のひとつ）の是非は、その資産から得られるサービスの価値（純額）が測れば、その答が求められる。ここで、当該資産（コピー機）は、ストック（量）として測られ、資産からのサービスは、フロー（量）として測られる。そこで、以下では、財務管理のみならず、経営・経済の分野に出てくる変数の一般的な二分法であるストック（量）とフロー（量）との違いについて説明することにしよう。

30

このテクニカル・ノートは、クラス討議のための資料として作成された「財務管理入門」に大幅に加筆・修正を施した全面改訂版である。作成者は、慶應義塾大学大学院経営管理研究科および慶應義塾大学ビジネス・スクール教授の太田康信である。[1997年6月]